# ＩＳ【インフィニット・ストラトス】～空を翔ける虎～

ＡＫＩ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ【インフィニット・ストラトス】～空を翔ける虎～

【Ｎコード】
Ｎ００４０Ｒ

【作者名】
ＡＫＩ

【あらすじ】
ＩＳ【インフィニット・ストラトス】にオリジナルキャラを導入した話です。

感想とかをくれるとうれしいです！

誤字や脱字があったら教えて下さい。

# プロローグ

◇

とあるマンションの一室。一人の少年がソファーに腰かけている。

がっくりと背もたれに、もたれかけているその少年は少し長めの前髪を欝陶しそうに手で払った。

ピリリリッ！ピリリリッ！

目の前の机に置いてある携帯から着信音が鳴り響く。

少年は小さくため息をつくと、のろのろとした動作で携帯を手に取り、通話モードに切り替えた。

「…もしもし」

覇気のない声で少年はしゃべる。

『決まったか？』

電話口からトーン低めの女性の声がする。

少年はこの女性の名前を知っている。

【織斑千冬（おりむら ちふゆ）】

三年に一度行われるＩＳの世界大会『モンド・グロッソ』。
その第一回大会において優勝した人物。

「……やっぱり行かなきゃダメですかね？」

『お前には国から保護と監視の両方をつける。今でさえ、マスコミやらが家に押しかけてきているのだろう？場合によっては命も狙われるぞ。それに――――』

「わ、分かりましたよ。行きます、行きますから」

『わかればいい』

どっと疲れたようにソファーにもたれながら、さっきよりも深いため息をついた。

「……で？いつ行けばいいんです？」

『今からだ』

「……へ？」

『今からだと言っている。二度は言わせるな』

「いやいやいや！まだ何も準備とかしてませんからね！？」

『心配するな。荷物は後から送ってやる。すでに迎えの者がそっち

にいる』

その言葉を合図にしたかのように、玄関の扉が勝手に開く。
そしてそこから黒服の屈強な男達が入ってきた。

「ち、ちょっと！何勝手に人の家に入ってきてんだ！！」

そんな少年の叫びも虚しく、男達は少年の腕をがっちりと掴むと、そのまま運び出す。

「ちょ…ふざけんなぁ！離せ！離せよぉ！！」

抵抗しようと暴れるが、男達はびくともしない。
暴れた拍子に携帯が手から落ちる。

「こ、このクソ野郎共！離せって言ってんのが聞こえねぇのかぁ！！」

少年の罵詈雑言にも男達は無反応のまま、少年を部屋から連れだした。

部屋には、ぽつんと残された携帯が転がっている。

『……鬼城（きじょう）　虎博（こはく）か……。また馬鹿が増えるな』

## ＩＳ学園

◇

鬼城はうっすらと目を開けた。

場所は高級そうなリムジンの座席。

「……寝ちまったのか」

外の景色を見ようと起き上がると、滑らかな動きでリムジンが止まった。

「到着しました」

低い男の声とともに、ドアが自然に開く。

「……そりゃどうも」

小さく呟き、車から降りると、すぐさまリムジンのドアは閉まり、走り去って行った。

（……来ちゃったか……）

目の前にある建物を見上げる。

「ＩＳ学園……」

ＩＳの操縦者を育成する教育機関。

つまり、女性しかいないということだ。

「はぁ……」

口からは自然とため息がこぼれる。

どうしてこうなった。

頭の中に浮かぶのは一週間前の出来事。

自宅のすぐそばでトラックの横転事故があった。

ただの横転事故のはずなのに、全国中にそれは広がった。

何故か。その理由はそのトラックの積んでいた物。

それは———ＩＳだった。

ＩＳを所持している大企業のトラックが横転したのだから、それが全国に広まるのに時間はかからなかった。

そして、偶然にも鬼城はその場に居合わせていた。

目の前でトラックが倒れて、積んでいたＩＳがすぐそばまで転がってきた。

興味本意で目の前のＩＳに手を伸ばした。

それはＩＳが女性にしか動かせないから触っても大丈夫だと思ったから。

だが触れた瞬間、キンッと金属質の音が頭に響いて———ＩＳが起

動した。

それからが大変だった。

ＩＳを動かしてしまったことによって、世界で二人目の男によるＩＳ操縦者として、ニュースに取り上げられ、通っていた高校からは自宅謹慎を命じられたし、自宅にもマスコミやらが大量に押し寄せてきた。

しかし、それらの対応に疲弊しきっていた鬼城に一本の電話が届いた。

それが……ＩＳ学園からの電話だった。

そして今にいたる。

思い返して、遠くを見つめていると誰かが走ってくるのが見えた。

女性のようだ。

身長は低めで、服のサイズが合ってないのかだぼっとしていて、かけている黒縁眼鏡もやや大きめで、若干ずれている。

その女性はピタリと鬼城の目の前で止まると

「鬼城　虎博くんですよね？」

「えっと……誰？」

「ご、ごめんなさい！自己紹介が先ですよね！私の名前は山田真耶です。あなたのクラスの副担任なんですよ」

「へぇ……って、副担任！？」

鬼城が驚いたように声を上げる。

（……同じくらいの年かと思ったのに）

思っただけで決して口には出さない。

「えぇ、これからよろしくね。これから教室に案内しますね。ついてきて下さい」

そう言って歩き出す山田先生。

その後に続く。

「そういえば担任は来ないんですね」

何の気無しに聞いてみる。

「えぇ、織斑先生は今、会議中です」

「へぇ……じゃあ山田先生と二人で教室に行くんですね」

そう言うと突然、前を歩いていた山田先生が立ち止まった。

「ん？先生？」

どうしたのかと思って顔を見てみると、何故だか赤面して俯いている。

「ふ、二人きり……生徒と教師……あっ！だ、ダメですよ！鬼城くん。まだ会ったばっかりなのに、先生、強引にされると弱いんですから……それに私、そんな経験ないですし……」

ぶつぶつとそんなことを言っている。

（……大丈夫か？この人）

目の前で暴走している女教師を見て、少し心配になる鬼城。

「先生！先生！しっかりして下さい！」

山田先生の目の前で手を振りながら、大声で呼ぶ。

すると

「は、はいっ！」

やっと現実へと戻ってきてくれた。

「ご、ごめんなさい！それじゃあ行きましょうか」

山田先生が慌てたように歩きだして———こけた。

「うー、いたい…」

（……何もないとこでこけた……）

目の前にいる山田先生のドジっ娘ぶりに、驚きの表情を隠すことは出来なかった。

◇

「鬼城　虎博です。よろしく」

山田先生に案内されたクラスでの早速の自己紹介。特に言うこともないので、簡単に名前とお決まりの挨拶だけを告げる。

そう、これで俺の自己紹介は終わり。

……そう思っていたんだが……

（なんだ？この『もっと何か言ってよ』的な空気は）

背中からは冷や汗が流れるのを感じる。

（えっと……）

自己紹介を終わるに終われない俺。

うろたえてる間にも女子達からのキラキラとした視線が痛い。

（ど、どうする？何を言えばいい？何か言わないと……）

そんなことを思い、頭の中がぐるぐると混乱してきた鬼城は――――

「し、質問とかある人いますか？」

（俺は教師か！！）

見てみろ！

クラス全体がカチンと固まっているじゃないか！

その様子を見て、俺は感じた、『俺の学生生活は終わった』と。

頭の中ではこの後起こる失望のため息で教室が暗くなり、蔑んだ視線にさらされる様が浮かぶ。

だが、次の瞬間、教室を包んだのは失望のため息ではなかった。

「キャーーーーー！！男子！二人目の男子よ！」

「な、何でも？何でも質問していいの？」

「はいはーい！！質問しつもーん！」

教室に黄色い声援が響いた。

（うおっ！！なんだなんだ？）

クラスの女子はワイワイと、騒いでいる。

突然の騒音に頭がクラクラする。収集がつかなくなったクラスをどうしようかとあたふたしていると

パアンッ！！

いきなり頭を叩かれた。

「痛ったぁ！！」

振り返ると、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているが、けして過肉厚ではないボディライン。その鋭い吊り目はまさしく———

「狼！？」

バシンッ！

今度は出席簿で叩かれた。

「教師だ、馬鹿者」

トーン低めの声。

この声には聞き覚えがある。

「織斑　千冬……？」

バシンッ！

また叩かれた。

初対面の相手にここまで叩かれたのは始めてだ。

「織斑先生と呼べ」

「……はい」

「わかればいい」

鋭い吊り目で俺を見下ろす鬼教師。

「知っているとは思うが、私が担任だ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。分かったら返事をしろ。分からなくても返事をしろ」

「……はい」

なんという暴力発言。この人ほんとに教師か？

「トイレや更衣室の場所は織斑に聞け。同じ男子同士だ」

「……織斑？」

そう言えば、このクラスにはこの鬼教師の弟がいるんだったな。

「おーい！ここだよ」

真ん中の列の一番前の席から手が挙がる。

てか、目の前にいたのに気付かなかった……。

「織斑　一夏…だよな？同じ男子同士、よろしく頼む」

「おう、仲良くしようぜ」

なんて気さくなやつなんだ。
とてもあの鬼教師の弟とは思えない。
「自己紹介は終わりだ。とっとと席につけ」
言われるがままに、席につく。
逆らっても、無駄なのは分かりきっていることだ。
（……しかし、見渡す限り女子っていうのは落ち着かないな）
現に今も隣の女子からはちらちらと見られている。
それに気付いて俺がその女子を見ると、慌てて視線がそらされる。
（……話しかけてみるか……）
「あのさ」
話しかけた女子がビクゥ！と体を振るわせた。
「な、何かな？」
引きつった笑顔で聞いてくる。……嫌われてるのか？
「いや、隣の席だし。よろしくな」
「よ、よろしくね」
温和に接したつもりなのに、そう言ったきり、顔を赤くして俯いてしまった。

（……何がいけなかった）

勇気を出して、声をかけた結果が失敗に終わる。

（先が思いやられるな……）

その後でまた話しかける勇気は俺にはなかった。

◇

「……」

午前中の授業が終わり、今は昼休み。

相も変わらず、周りの女子達からの視線が痛い。

これから毎日こんな感じかと思うと辛くて仕方ないのだが、今の俺はもっと大きな問題に直面していた。

「虎博！食堂行こうぜ！」

やたら元気に一夏が話しかけてくる。
俺は午前中だけで男友達という存在がいかに大事なのかを思いしらされた。
授業と授業の間の休み時間。
周りからの好奇の視線にさらされている時に一夏が話しかけてくれて、どんなに助かったことか。
俺の中での一夏への好感度メーターはうなぎ登りだ。
「そうだな」
そう言って立ち上がったところで――――閃いた。
こいつなら今の俺が直面している問題を解決出来るかもしれない。
「なぁ、一夏」
「ん？なんだ？」
「聞きたいことがあるんだが」
「いいぞ！何でも聞いてくれ」
なんと頼もしい返事。
こんなにも頼りがいのある友人と出会えたことは幸せだ。
こいつなら俺を助けてくれる！
心の中で確信した。

「授業で言ってることがさっぱり分からないんだ…！」

思いきって自分の弱さを吐露。
大丈夫。一夏ならきっと受け入れてくれる。

「あぁ、俺もまだよく分からないんだ」

一夏は平然とした顔でそう言いきった。

……あれ、おかしいな。
全然頼りにならないぞ。

「えっ、それでいいのか？」

「まぁ、最近は箒とかセシリアに教えてもらってんだけどな」

「箒？セシリア？」

「あぁ、箒はあそこにいる黒い髪のポニーテールのやつで、俺の幼なじみなんだ。……セシリアは箒の隣にいるやつだ。イギリスの代表候補生だよ」

一夏の指さした方を見ると、そこには何やら言い争いをしている二人がいた。

「なぜ、お前が一夏と一緒に昼食をとるのだ！」

「あら、篠ノ之さん。私は一夏さんと放課後の特訓についての話がありますので、別に問題はないかと」

「必要ない！一夏からは私が直接頼まれているのだからな！」

どうにも穏やかな様子じゃない。

「……あの二人か？」

「そうだぞ」

「……いつもあんな調子か？」

「大体、あんな感じだ」

二人の剣幕に思わず、たじろぐ。

……なんで喧嘩してんだよ？

「そうだ！お前も俺と一緒に教われば いい」

名案が浮かんだような顔で一夏が聞いてくる。

「……あの二人に？」

まだあの二人は言い争っている。

……二人ともさっきからすごい剣幕だ。周りの女子も引いてるぞ。

しかし、一夏と一緒に勉強出来るのは心強い。

「じゃあ、俺も一緒に———」

ギロッ！！

言いかけた途中で二人から思いっきり睨まれた。

え？何これ？怖いんだけど。

てか、こっちの話が聞こえてたのかよ。

「……考えとくよ」

ここは無難な答えをして、とりあえずあの視線からの回避を選ぶ。

「そうか？お前ならいつでも大歓迎だぞ」

嬉しいことを言ってくれるが、あの二人の視線はちっともそうは言っていない。

……随分と嫌われたもんだ。

「……食堂に行くんじゃなかったか？」

こういう時は多少強引にでも話題を変えた方がいい。

そして、何よりあの視線から逃げたい。

「おう、そうだったな」

そう言った一夏は辺りを見渡すと

「誰か一緒に行かないか？」

突然の爆弾発言。

「ちょ、お前何言ってんだ！」

「そう言うなよ。友達いないと高校生活つまんないだろ？」

そう言われると、何も言い返せない。

……だけど、俺って何か嫌われてるっぽいから、一緒に食べたいやつなんて――

「はいはーい！」

「わ、私も行く！」

「お弁当だけど行くよー！」

まさに入れ食い状態。

驚いたことに朝話しかけた子まで手を挙げている。

これは……どういうことだ？

「待って下さい！一夏さん！わたくしも行きますわ！」

「し、仕方ないな。私も行くとしよう」

あんなに言い争っていた二人がすでに一夏の後ろにいた。

さすがはＩＳ操縦者。

動きが機敏だ。

「じゃあ、みんなで行くか。ほら、行くぞ。虎博」

「……そうだな」

そして、一夏と俺に続く形でぞろぞろとみんなで食堂へと向かった。

◇

「ねぇねぇ！鬼城くん！鬼城くん！」

「鬼城くんは日替わり定食にしたんだね。あ、織斑君もだ」

「わ、私も日替わり定食にしようかな……」

今いるのは、食堂。
六人掛けのテーブルにわらわらと人が集まっている。
窓側に座っているのは、篠ノ之、一夏、セシリア。
そしてその向かいに俺が座っている。
右隣には、なんだかのほほんとした感じで、制服のすそが異常に長い子が座っている。
隣には、その子の友達が座っている。
テーブルの周りにいた女子達は、鬼教師の『邪魔だ』の一言で散り散りになっていった。

「ねぇ、きっくん」

のほほんとした子が話しかけてくる。

「き、きっくん……？」

それって俺のことだよな…？

「うん、鬼城くんだから、きっくんだよー」

……なるほど、納得だ。

「あれ？ダメだったかなー？」

「いや、そんな風に呼ばれたの初めてだからな。少し驚いただけだ。好きに呼んでくれていいよ」

「それはよかったよー」

そう言うと、のほほんとした子（俺の中では、のほほんさんと呼ぶことにする）はニコニコと笑った。

（よかった。のほほんさんはいい人っぽいな）

安心した俺はバクバクと今日の日替わり定食の鯖の味噌煮を食べる。

食べながら一夏に視線を向けると……そこには険悪な雰囲気の女の子に挟まれた一夏が、気まずそうにご飯を食べていた。

目が合うと、助けを求めるような顔をする一夏。

そんな顔されてもね……。俺、この二人のこと知らないし……。かと言ってこのまま一夏を見捨てるわけにもいくまい。友達を裏切って飯を食ってもまずいだけだからな。

「……そこの二人」

試しに呼んでみると、二人ともこっちを向いた。

「俺はお前らのこと知らないんだ。だから自己紹介とかしてくれないか？」

本当はすでに名前は知っているが、ここは知らない振りをしよう。

「そうだぞ。箒、セシリア。虎博に自己紹介ぐらいしないとな。これから同じクラスメイトなんだから」

一夏がそう言うと、篠ノ之が口を開いた。

「……篠ノ之　箒だ。よろしく」

簡単な自己紹介だな！おい！……まぁ、俺もさっきはそうだったんだけど。

「じゃあ、次はわたくしの番ですわね」

セシリアが立ち上がって、腰に手を当てる。

そのポーズが似合う人間を初めて見たよ。

「わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生にして、入試首席ですわ」

ふふん。と自慢気に胸を張るオルコット。

代表候補生というものが何だかは知らないが、この態度からしてすごいものに違いない。

「へー、すごいな」

「……あなた、本当に分かってますの？」

セシリアがジト目でこっちを見てくる。

「セシリアはね、織斑くんとクラス対抗を争って、ＩＳで戦ったんだよ」

のほほんさんの隣にいた女子がそんなことを言った。

「へぇ…。それってどっちが勝ったんだ？」

「もちろんわたくしが勝ちましたわ」

そう言ったセシリアは上機嫌そうに見える。

「じゃあ、オルコットがクラス代表なのか？」

「……いや、クラス代表は俺だ」

一夏が暗い顔で答えた。

「お前負けたんだろ？争ったんだから、勝った方がクラス代表だろ」
当然の疑問をぶつけると
「それは――――」
「それはわたくしが辞退したからですわ！」
一夏を遮り、セシリアが言い放つ。
「確かに一夏さんは勝負では負けましたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから」
代表候補生っていうのは、プライドの高さも選考基準に入っているのだろうか。
「それで、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたの。やはりＩＳ操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」
クラス代表というのは、クラス長みたいなものだろう。
きっと雑用やら何やらをやらされるんだろう。
「それはまたありがた迷惑な話だな」
「何か言いまして？」
「いや、何でもない」

小声で言ったつもりだったのに睨まれた……。
なんという聴力。
さすがは代表候補生。

「よかったじゃないか、一夏。クラス代表になれて」

実際めんどくさい仕事だろうけど。

「……いいわけあるか！俺はやりたくなかったってのに、周りのやつらが強引に……」

苦々しい顔で一夏がそう言った。

「まぁ、そう言うなって。なかなかなれるものじゃないだろ？」

なりたいものでもないが。

「……人事だと思ってるだろ」

一夏が恨めしげにこっちを見てくる。
むむ……顔にでていたか。

「何をのんびりしている。もうすぐ昼休みも終わるぞ」

そんな時、後ろから鬼教師の声がした。
何故だろうか。まだこの学園に来て、まもないというのに、この声を聞くだけで背筋に冷たいものが走る。

「それと鬼城。言い忘れていたが、お前にも専用機が用意される」

どういうことか、まったく分からないという顔をしていると、目の前の教師は呆れたようにため息をつくと呟く。

「織斑。説明してやれ」

「えっ、俺？俺よりセシリアとかの方が――――」

「説明してやれ、と言ったが？」

「……はい」

実に分かりやすい力関係だ。

その後の一夏の説明を簡単にまとめると

一、ＩＳは世界に４６７機しか存在しない。

二、ＩＳに使われているコアは篠ノ之博士とやらにしか作れなくて、しかもその博士はもうコアを作っていない。

三、専用機をあげるけど、代わりに男のＩＳ操縦者なんて特例なんだから実験体になってね。

ということらしい。

「予定では一週間後に届くことになっている」

俺の入学は急だったはずなのに、随分と早いな。

「……ということだ。連絡は以上だ。次の授業に遅れないようにしろ」

そう言って、すたすたとどこかへと行った織斑先生。

「すごいじゃないかー。きっくん」

先生の姿が見えなくなると、のほほんさんが言う。

「これで一緒に放課後に特訓出来るな」

一夏が明るくそう言ったが、その言葉を聞いたオルコットと篠ノ之がギンッ！とこちらを睨む。

……俺が何かしましたか？

「二人とも目が怖いよー」

のほほんさんが指摘すると、二人はハッ、としたような顔をして、慌てて顔を元に戻した。

「ま、まぁ同じ専用機持ちとして、分からないことがあれば聞いて下さっても結構ですのよ。なにせ、わたくしは代表候補生ですから」

「わ、私にも聞いてくれて構わないぞ」

一転して、急に親切になる二人。

……なんで一夏をちらちらと見てんだ？

「じ、じゃあ、俺も一夏と一緒に放課後特訓させてもらおうかな」
遠慮がちにそう言うと
「よし！そうしようぜ」
一夏が嬉しそうに言う。
一方で篠ノ之とオルコットはピキッ！と一瞬、動きが止まる。
「箒もセシリアも構わないよな？」
そんな二人に気付かない一夏が無邪気にもそう聞いた。
すると
「……い、一夏がそう言うなら、私は別に構わん」
「わ、わたくしも、一夏さんがそうおっしゃるのであれば……」
渋々ながら、承諾してくれた。
……おぉ！完全に嫌われてると思っていたが、そうでもないらしい。
「おっと……時間がやばいな。そろそろ行こうぜ」
一夏がそう言って立ち上がる。
「そうだな」

その後に続くようにして立ち上がり、一夏の後に続いて食器を片付けて、教室に戻るべく歩きだす。

その時に後ろから

「「……一夏（さん）の馬鹿」」

誰かのそう小さく呟く声が聞こえた。

◇

「ぐは……」

放課後、机の上にぐったりとうなだれる俺。

「や、ややこしすぎる……。ちっとも分からん……」

当然のごとく出てくる専門用語の羅列。

辞書もないのに、ＩＳ初心者の俺に分かるわけがない。

状況も朝からあまり変わっていない。

他学年・他クラスの女子が押しかけてきて、きゃいきゃいと騒いで

いる。

（……まるで珍動物だな）

一夏はよく男一人でこの生活に堪えてきたものだ。

俺だったら、堪えられない。

「ああ、鬼城くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

呼ばれて顔を上げると、副担任の山田先生がいた。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そういえばそうだった。

ＩＳ学園は全寮制だ。

生徒はすべて寮で生活を送ることが義務づけられている。

「俺の部屋はどこですか？やっぱり一夏と同じ部屋なんですか？」

「……いや、その……急なことだったので……部屋割りの調整がつかなかったというか……」

言いづらそうに山田先生が体を左右に揺らす。

……どうかしたのか？

「お前は一人部屋だ」

そんな時、俺の背後から声が聞こえた。……絶対にあの鬼教師だ。

振り向かなくても分かる。

「へぇ……。いいなぁ。一人部屋かよ。何で俺の時はそうじゃなかったんだよ。千冬姉」

いつの間にか、そばにいた一夏が羨ましげにそう言うと

バシン！！

「織斑先生だ」

「……はい、織斑先生」

一夏の脳細胞は今日で何万個死んだだろうか。

「それで俺の部屋っていうのは？」

俺が尋ねると山田先生が言いづらそうに口を開いた。

「そ、そのですね……急な事でしたので……部屋割りの調整が……」

……それはさっきも聞きました。

そんな山田先生の様子を見かねてか、織斑先生が口を開く。

「お前の部屋は物置だ」

まさかの発言。

教師が生徒に物置で暮らせとおっしゃっている。

……おかしくね？

「はぁ！？じゃあ俺は掃除用具とかと一緒に寝るのか！？」

バシィン！！

……目上の人に対する言葉遣いは気をつけよう。

「言い方が悪かったな。物置を改装した部屋だ。だから他の部屋と比べて、狭いというだけだ」

「……荷物はどうなってますか？」

頭をさすりながら尋ねる。

「すでに部屋に手配してある。……それとシャワーも設置出来ていないから、織斑の部屋のを使わせてもらえ」

……随分な待遇だ。

「す、すみません。部屋割りの調整がつくまで我慢してもらえますか？」

涙目でこっちを見つめる山田先生。

う……そんな目で見られたら断れるわけないじゃないですか。

「……はい」

不本意だが、仕方ない。

「あ、ありがとうございます！じゃあ、時間を見て部屋に行って下

さいね。夕食は六時から七時です。大浴場もありますけど、今のところ織斑くんと鬼城くんは使えません」

まぁ、当たり前か。

同年代の女子と一緒に風呂に入るわけにはいかない。

「えっと、それじゃあ私達は会議があるので、これで」

そう言って鬼教師と山田先生が教室から出て行った。

「えっと……シャワーの事だけど、箒には俺から話しとくな」

一夏が俺の肩にポンッと手を置く。

「……頼む」

そう言って、俺はまた机に突っ伏した。

……もう、どうにでもなれ。

◇

「えっと……どこだ？」

あの後、放課後特訓のある一夏は篠ノ之とオルコットに連れられ、どこかに行ってしまった。

ついていってもよかったのだが、部屋の様子が気になったので、一夏とは夕食の時にまた会う約束をして分かれた。

山田先生に渡された紙を見ながら、部屋を捜す。

「ここか……？」

扉を見ると、『臨時部屋』と書いてある。

（鍵がない……）

さすがは元物置。
シャワーもなければ、鍵もない。
まぁ、普通の物置には必要のないものだしな。

そう思いながら扉を開けると、まず目に入ったのはふかふかのベットだった。

とても高そうだ。
その側には、段ボール箱が積まれている。
恐らく荷物だろう。

もっと狭いと思っていたが、一人で暮らす分には充分な広さだ。

持っていた荷物をとりあえず床に置いて、早速ベットに飛び込む。

……おぉ、このモフモフ感がたまりませんな。

（……やばい。寝ちゃいそうだ）

疲れが溜まっていたのか、急に瞼が重くなる。
部屋にある時計に目をやると、時刻は五時をさしていた。

（……少しだけなら）

そう思い、ゆっくりと瞼を閉じた俺は睡眠へと落ちていった。

・・・・・・・・・・

どれくらい眠ったのだろうか。
まだ瞼が重い。

それでも目が覚めたのは誰かが、俺の頬をつんつんと突いているからだ。

「……いちかぁ？」

いかん。眠いせいで呂律が回らない。
一夏が起こしにきてくれたのだろうか。
眠い目を擦りながら、ゆっくりと目を開くと――――女子がいた。
「あ、起きちゃった」
「あー！私もつんつんしたかったのに！」
「私まだ寝顔撮ってない！」
「大丈夫。私が撮っといたから。後であげるわ」
「『いちかぁ？』だって！かわいい！！」
しかも一人じゃない。
大勢の女子がベットを囲むようにして、こっちを見ている。
「……うえぇ！？」
眠気が一気に吹き飛ぶ。
飛び上がるようにしてベットから体を起こす。
「ありゃりゃ、完全に起きちゃったね」
「あんたがつんつんしすぎるからでしょ」
「ごめんね。起こしちゃって。また寝てもいいよ」

冗談じゃない。
こんなにジロジロ見られながら寝れるわけがない。
「……何でここにいるのさ」
気になっていたことをズバリ聞いてみる。
「ここが鬼城くんの部屋だ、って情報が入ったから」
「そうそう、挨拶しとこうかな？って思って来たんだよ」
「だけど寝てたから起きるのを待ってたの」
……優しい心遣いだが、人の寝顔を覗き込むのはどうかと思う。
一旦、部屋に戻るという選択肢はなかったのだろうか。
人の頬をつんつんするのではなく。
「虎博ー！いるかー？」
一夏の声が廊下から聞こえる。
時間を見ると六時十五分。
夕食の迎えに来てくれたのだろう。
「おう！ちょっと待ってくれ！」
聞こえるように大声を出す。
ベットから降りようとすると、女子達が道を開けてくれた。

モーゼみたいだな……。
「すまん。待たせたな」
「気にすんなって。……お前も大変そうだな」
一夏が哀れむような目で俺と俺の出てきた部屋を見る。
「……これから慣れるさ」
力無く笑うと後ろから女子達の囁き声が聞こえた。
「やっぱり鬼城くんてさ……」
「あ、私もそれ思ってた」
なんだろうか。
俺について何か言っているらしい。
耳を傾けると
「「……やっぱり背が低いよね」」
ぐは……。
今のは俺の心にクリティカルヒットした。
あまり言いたくないが、俺の身長は平均的な女子のそれと変わらない。
いわゆるコンプレックスってやつだ。

「まぁ……なんだ……気にすんなって」

一夏がポンポンと頭を叩く。

……それは俺の頭が叩きやすい位置にあるってことか？一夏さんよぉ！！

「……いいさ！まだ俺の成長期は終わっていない！これから伸びるんだからな！！」

「そうだ！その意気だ！」

そう言って、また頭をポンポンと叩く一夏。

……このやろう、わざとやってるんじゃなかろうな。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0040r/

ＩＳ【インフィニット・ストラトス】～空を翔ける虎～

2011年10月8日19時19分発行